

## ◆書評◆

シンシア・エンロー著／望戸愛果訳

## 『バナナ・ビーチ・軍事基地

国際政治をジェンダーで読み解く』

(人文書院 2020年 ISBN 978-4-409-24134-9 5800円+税)



小ヶ谷 千穂

(フェリス女学院大学 文学部)

ジェンダー研究の中でも国際関係や国際政治、国際社会学の分野などを少しでも学部・大学院時代にかじった人であれば、エンローの *Bananas, Beaches and Bases: Making Feminist Sense of International Politics* (初版 1989 年。改訂版 2014 年) に触れたことがない人はいないはずだ。カラフルな表紙と装丁だけでなく、その語り口も含めていわゆるペーパーバックの小説のようなタッチの本書の初版が出されたのは 1989 年 (U.S. 版は 1990 年) である。2002 年 12 月から 2003 年 3 月にかけてはお茶の水女子大学ジェンダー研究センターの客員教授として滞在したエンロー教授の快活で颯爽とした語り口に直接触れた人も多いだろう。

1999 年に『戦争の翌朝—ポスト冷戦時代をジェンダーで読む』(池田悦子訳: 原題 *The Morning After: Sexual Politics at the End of the Cold War*) がおそらく初めてのエンローの翻訳本として日本で刊行され、その後『策略: 女性を軍事

化する国際政治』(上野千鶴子監訳・佐藤文香訳 2006 年: 原題 *Maneuvers: the International Politics of Militarizing Women's Lives*)、『〈家父長制〉は無敵じゃない』(佐藤文香監訳 2020 年: 原題 *The Big Push: Exposing and Challenging the Persistence of Patriarchy*) などが刊行される中、エンローの著作の中でおそらく最も読まれているはずの *Bananas* の日本語訳が、満を持して、エンローの優れた読み手である望戸愛果によって今回翻訳・出版された。

エンローは国際政治学者、とされることが多いようであり、また「軍事化とジェンダー」の切り口で語られることが多いかもしれないが、国際社会学・国際移動論を専門とする評者にとってのエンローとの初めての出会いは、初版の第 8 章 “‘Just Like One of the Family’: Domestic Servants in World Politics” (本書第八章の原型) であった。「個人的なことは政治的なこと / “Personal is political.”」とい

うフェミニストにとっての最も重要なテーゼを、「個人的なことは国際的なこと“Personal is international / global”」、そして「国際的なことは個人的なこと“Global / international is personal”」(第九章)と華麗に展開して見せたエンローの代表作である本書が、分野を越えて多くの読者の「フェミニスト的好奇心」に火をつけるチャンスが、今回の日本語訳でさらに広がったことを歓迎したい。

本書は第二版への序文および初版への序文に続いて、第一章「ジェンダーが世界を動かすー女性はどこにいるのか」、第二章「レディ・トラベラー、美人コンテスト優勝者、スチュワーデス、そして客室係のメイドー観光の国際ジェンダー・ポリティクス」、第三章「ナショナリズムと男性性ーナショナリズムの物語は終わらない」、第四章「基地の女性たち」、第五章「外交的な妻と外交的ではない妻」、第六章「バナナに夢中！ーバナナの国際政治において女性はどこにいるのか?」、第七章「女性の労働は決して安くはないーグローバルなブルジョーズと銀行家のジェンダー化」、第八章「グローバル化されたバスタブをゴシゴシ洗うー世界政治における家事使用人」、そして第九章「結論ー個人的なことは国際的なこと、国際的なことは個人的なこと」の9つの章と訳者解題、そして60ページ近い膨大な注と索引から構成されている。

「国際政治とジェンダー」「観光とジェ

ンダー」「ナショナリズムとジェンダー」「基地とジェンダー」といった、2020年代の今日ではいずれも馴染みがあるトピックや、チキータ・バナナを例としたグローバルな生産と消費のジェンダー化された諸相、ラナ・プラザ事件が記憶に新しいファスト・ファッションの生産における途上国の女性労働の搾取、そして「移動の女性化」を象徴する世界中の家事労働者(家事使用人)たちの国際的な連帯など、本書の射程は初版から20年以上を経ても色あせていないことに、あらためて気づかされる。時代の変化に応じてアップデートされながらも、本書が当初から持っていた「国際政治を有益に理解するーフェミニスト的に理解するーためには、型にはまった外交専門家が単に『私的』だとか『家庭的』だとか『地域的』だとか、『取るに足らない』として通常は片付ける場所まで追いかけていって多様な女性たちを理解することが必要とされる」(29頁)という視点を、私たちはいまだに必要とし、必要とされ続けている。

「『女性はどこにいるのか?』と問うことは、この世界がどう動いているのかを正確に知ろうと決意することによって動機づけられている」(32頁)、という言葉通り、私たちの日常の「個人的なこと」と、そして報道などを通して日々目にする「国際的なこと」のいずれもが、「女性はどこにいるのか?」という問いによって、その複雑さを露呈する。

それは、COVID-19パンデミック、アフガニスタンからの米軍撤退、そしてロシアのウクライナ侵攻といった、ここ数年の出来事だけをとってみても明らかだ。ウクライナの成人男性が「愛国法」で出国できないこと、避難所が女性と子どもたちで埋め尽くされていることに、たとえウクライナ政治に精通していなくとも、そこに「国民」の間でのジェンダーの線引きが強烈に引き直され、「“正しく”戦う国民」像が再強化されていることを、読者は本書から学び取っているはずだ。日本において、コロナ感染が米軍基地から拡大してきているというニュースを耳にした時に、そこで最も感染リスクにさらされやすい人たちはいったい誰なのかを、本書の読者は容易に想像することができる。日本の水際対策が一時的に緩和され、介護や家事分野で働く移住労働者が入国したニュースを見た時に、これから日本で働こうとする女性たちの笑顔が、どのように複数の国家の思惑とジェンダー規範によって支えられているのかということ、本書に触れた人は自ら読み解くことができるだろう。エンローが本書を通して私たちに埋め込んでくれたフェミニストのレンズの効力は、常に更新され続けている。

本書は、多くのフェミニストにとって、いつも「そばにいてくれる本」と言える。「そばにいてくれる」とは言っても、決して聖書のような更新不可能で巨大な指南

書としてではなく、今の国際政治を、そして職場や学会でのハラスメントをどう考えたらいいのか、という時にもいつも「そばにいてくれる本」なのである。「そばにいてくれる本」と思わせてくれる書籍、中でも研究書はそう多くないはずである。エンロー自身が、明らかにそのことを意識していることは、(本書の内容)を「自分自身の経験に照らし合わせて分析しながら、読者自身が本書のページの余白に書き込むものは、異なる世界を生み出すという点において、ここに隙間なく印刷されているように見えるものと少なくとも同じくらいに有益となるであろう」(65-66頁)との言及からもわかる。また、訳者解題でも触れられているように、エンロー自身が初版からこの第二版への過程で「8割を書き換えた」という、その真摯さと研究への情熱も、本書の隠れた魅力であるはずだ。

こうした類まれなる著作を、日本語読者に対してより近づけてくれた訳者に、感謝の念を強く持っている人は少なくないはずである。翻訳書としての本書の一つの特徴とも言える、いわゆる「意識」をできるだけ遠ざけて原文に忠実であろうとする翻訳からは、訳者のエンローに対する誠実さと尊敬とがよくわかる。だからこそ、訳者の誠実な翻訳作業を通して、読者はエンローにより一層近づき、本書と対話を続けられるのではないだろうか。